

▶17日 水曜

申命記

31:30 モーセは、イスラエルの全集会に聞こえるように、次の歌のことばを終わりまで唱えた。

32:1 天よ。耳を傾けよ。私は語ろう。地よ。聞け。私の口のことばを。

32:2 私のおしえは、雨のように下り、私のことばは、露のようにしたたる。若草の上の小雨のように。青草の上の夕立のように。

32:3 私が主の御名を告げ知らせるのだから、栄光を私たちの神に帰せよ。

32:4 主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。

32:5 主をそこない、その汚れで、主の子らではない、よこしまで曲がった世代。

32:6 あなたがたはこのように主に恩を返すのか。愚かで知恵のない民よ。主はあなたを造った父ではないか。主はあなたを造り上げ、あなたを堅く建てるのではないか。

32:7 昔の日々を思い出し、代々の年を思え。あなたの父に問え。彼はあなたに告げ知らせよう。長老たちに問え。彼らはあなたに話してくれよう。

32:8 「いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、国々の民の境を決められた。

32:9 主の割り当て分はご自分の民であるから、ヤコブは主の相続地である。

32:10 主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだし、世話をし、ご自分のひとみのように、これを守られた。



32:11 わしが巢のひなを呼びさまし、そのひなの上を舞いかけり、翼を広げてこれを取り、羽に載せて行くように。

32:12 ただ主だけでこれを導き、主とともに外国の神は、いなかった。

32:13 主はこれを、地の高い所に上らせ、野の産物を食べさせた。主は岩からの蜜と、堅い岩からの油で、これを養い、

32:14 牛の凝乳と、羊の乳とを、最良の子羊とともに、パンの物である雄羊と、雄やぎとを、小麦の最も良いものとともに、食べさせた。あわ立つぶどうの血をあなたは飲んでいて。」

モーセの歌が32節から始まります。はじめに神様の正義と真実が語られますが、一方イスラエルの「よこしまで曲がった」民であることが告発されています。モーセの告発は、それによって溜飲を下げるといったものではなく、イスラエルに「昔の日々を思い出し」て、主のみわざを再認識するためのものです。

そこには主の慈しみと力が述べられています。私たちも人生を振り返り、もう一度主のこれまでの慈しみを思い出し、それを可能とした主の力に信頼しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

